慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アフシャール朝ナーデル・シャーによるマシュハドの都市開発整備事業
Sub Title	Nāder Shāh's urban development project in Mashhad during Afshārid period.
Author	杉山, 隆一(Sugiyama, Ryuichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2017
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.1/2 (2017. 7) ,p.33(33)- 66(66)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20170700-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アフシャール朝ナーデル・シャーによるマシュハドの都市開発整備事業

杉山隆一

一、はじめに

現在のイラン・イスラーム共和国の北東部に位置する都市マシュハド Mashhad は、一二イマーム・シーア派（以下、シーア派と略記）第八代イマーム、レザー Emām Reẓā（ʻAlī b. Mūsā al-Riḍā）の廟を中心に発展を遂げたことで知られる。このレザーの廟の所在地は元々小村に過ぎなかったが、モンゴル期以降のイラン地域一帯でのサイイド信仰の深化やサファヴィー朝によるシーア派化政策といった当該の地域における歴史的な宗教性の変遷の結果、都市化のみならず地域の中心地としての発展も徐々に促されていくことになる。そして一八世紀に至り成立したアフシャール朝始祖のナーデル・シャー Nāder Shāh（在位一七三六―四七年。以下、ナーデルと略記）は、先行する遊牧王朝同様に首都を公式に定めることはなかったが、[1] このマシュハドを特に好み、自身の遠征時には代理を配置し、建設事業を多く行わなかった彼にしては自身の廟の建設など異例の開発事業を行った。そのため、シーア派振興策の一環として同都市の整備を行ってきた前王朝とは異なり、この時代にはナーデルが創始した王朝の実質上の支配の中心地としての都市開発・整備事業が展開されていく。そして彼の没後も、後継者たちは王朝の崩壊までこの都市を中心に統治を行った。

イラン地域における都市の成立・発展に関しては、まず自然条件、次に経済的な条件が大きな影響を与えてきた。そして前近代における遊牧政権の下では、これらの条件に加えて政治的な条件も付加されるようになり、主

にこれまで遊牧君主の居住区となる緑豊かな牧地としてのバーグ bāgh（庭園）を抱えた所謂「牧地都市」の形成と、さらにその牧地に建設された君主らの廟が核となって発展した「墓廟都市」という定義の下に検討が進められてきた。[2] 一方、マシュハドは先述のようにシーア派第八代イマーム、レザーの廟を核として都市の発展を見た点で、こうした都市の形成過程とは異なっている。[3] 但し、マシュハドの都市史の研究は全体として概説の段階に留まっており、[4] 専論としてはサファヴィー朝期においてシーア派化政策を進めた王族・貴顕らによる同都市への大規模な庇護政策に関する研究があるに過ぎない。[5] アフシャール朝ナーデル期について、欧米の研究はナーデルのその生い立ちや軍事活動の過程の中で生じた世界戦略が彼にマシュハドの「首都」化を促したと評価するも、当時の都市開発・整備自体については簡潔に言及されるのみである。[6] 一方で現地イランの研究は、当時におけるバーグやメイダーンの構造や、その存在を根拠としたエスファハーンとの類似性、ナーデル廟の建設に言及するも、事実関係の不十分な指摘に基づく検討に留まっている。[7] ナーデルの行った都市マシュハドの開発・整備事業の全容を把握した上で、その意図を考察した研究は見当たらない。[8]

本稿では以上のような都市マシュハドの歴史的な発展の経緯や先行研究を踏まえ、アフシャール朝君主ナーデル期における同都市に関し、当時の都市の構成やナーデルによる同都市の開発事業を可能な限り明らかにすると共に、その都市開発の意図と特徴の検討を試みたい。なお、史料としては、先行研究でも重用されている *ʿālām-ārā-ye Nāderī*[9] をはじめ、現地イランの研究では参照されていない *Zabūr-e Āl-e Dāvud* や *Majmaʿ al-tavārīkh*、*Mojmal al-tavārīkh*[10] 等も併せて使用する。加えて、ナーデルが行ったワクフ寄進の文書も有用であるため参照する。このワクフ文書については、アフシャール朝成立に四年先立つ形で一七三二年六月二四日（一一四五年一月一日 A.H.）に作成されたものである。ワクフ財にはマシュハド郊外の村落と市内の多数の店舗が設定され、受益対象にはレザー廟やナーデル自らの廟などが含まれる。[11] ワクフの視点からナーデルによる都市マシュハドの開発・整備事業について興味深い情報を提供するが、欧米や本邦の研究では活用されてこなかった史料である。[12]

二、アフシャール朝期までのマシュハドの発展[13]

はじめに、アフシャール朝期に至るまでのマシュハドの都市としての歴史的な発展、特に地域の宗教性及び王朝の宗教政策の変化によってその規模を拡大してきた過程を簡単に確認しておきたい。イマーム・レザーは八一八年（二〇三A.H.年）に当時のホラーサーンの主要都市のひとつトゥース Ṭūs 近郊のサナーバード Sanābād なる小村で死没し、彼の廟はこの地に置かれることになる。その後、ガズナ朝期以降にワクフによる廟の壮麗化、水路 kārīz の建設、周辺への店舗の設置などが行われ[14]、外壁ないし土塁も一一世紀には存在していたと言われる[15]。古くから町としての体裁を保つような建設事業が行われていたことは確認できるが、廟と周辺域の飛躍的な発展を促すものではなかった。

イルハン朝及びティムール朝の支配の時代を迎える一三～一五世紀頃に、イラン地域一帯ではサイイド崇敬が高まりを見せるが、この変化に伴ってレザー廟とその周辺域が徐々に本格的な発展を開始したと考えられる。そのことは、この頃に廟とその周辺域の呼称が現在と同じマシュハドへと変化していったことからも読み取れる[16]。

イルハン朝期には、ガザン・ハン Ghāzān Khān（在位一二九五―一三〇四年）が一二九九―一三〇〇年（六九九A.H.年）にレザー廟を受益対象としたワクフを行っている[17]。そしてティムール朝期に至ると建設活動も盛んになり、第三代君主シャー・ロフ Shāh Rokh（在位一四〇九―四七年）の妃ゴウハル・シャード Gowhar Shād による廟に隣接する形での自身の名を冠したモスク Masjed-e Gowhar Shād、及びサイイドの館 Dār al-siyāde の建設はよく知られている。さらにシャー・ロフは一四一八年（八二一 A.H.年）に参詣時の滞在用にバーグとその敷地内に屋敷 sarāy の設営を命じた[18]。これがマシュハドのチャハール・バーグ Chahār bāgh のはじまりとされる。そして、同王朝末期には宰相ミール・アリー・シール Mīr ʻAlī Shīr によってトゥースから同地への水路の建設も行われた[19]。イルハン朝からティムール朝にかけての宗教事情の変化によって、マシュハドはイマーム廟の所在地として支配権力側からの注目がより高まり、王族や貴顕のさらなる庇護の対象と化すことで、都市としての発展が進むことになる。

そしてサファヴィー朝が成立した一六世紀には、同王朝が推進したシーア派化政策により、同廟の重要性は著

しく向上し、王朝支配の宗教的な象徴、さらには同派の信徒の義務であるイマーム廟参詣の目的地として、王族、支配エリートによる廟の壮麗化を図る事業が展開される。廟に関連する主要な建設事業としては、シャー・タフマースプ Shāh Tahmāsp（在位一五三三―七四年）、シャー・アッバース Shāh 'Abbās（在位一五八八―一六二九年）による金箔での天蓋 gonbad の装飾[20]、シーア派信徒の遺骸を埋葬する附設の墓地の建設[21]などが挙げられる。合わせて、同王朝期にはマシュハドのさらなる都市化を推進する事業も開始された。シャー・タフマースプ期には土塁の再建が行われ[22]、外壁に囲まれた市街区では、シャー・アッバース期以降に廟を中心に東西に伸びる二つの大通りの建設[23]や、水路の再建[24]、さらにはワクフによって一〇〇軒を越える店舗をはじめとした商業施設の整備[25]が行われ、参詣地に不可欠な「門前町」的な装いをも与えると同時に地域経済の拠点化をも促す形で都市の整備が行われた。加えてワクフを原資とした多くのシーア派宗教学院 madrese の整備[26]や、アーシューラーの哀悼行事も行われるようになった[27]。このように同王朝期のマシュハドは、廟自体の開発はもちろんのこと、シーア派の参詣地たる宗教都市としての威容を備えると共に、商業面では中央アジアからの商人がイラン、アフガニスタン方面に向かう際の経由地のひとつとなり、地域経済の拠点としての機能をも担うようになる[28]。また、チャハール・バーグの開発も行われ[29]、同バーグは地方知事の滞在の場ともなり、地方行政の中心地としての機能をも有した[30]。

以上のようにマシュハドは、先行して存在したシーア派イマームの廟を中心に、後代になって水利やバーグの整備により牧地的な機能が付加されて発展を遂げていったという特色が確認できる。そして、サファヴィー朝期に至って王族・貴顕がシーア派体制堅持のためにレザー廟と都市マシュハドに対する庇護を積極的に推進することで、都市のシーア派的様相の強化と地域一帯の中心地化が進められた状態で、一八世紀のアフシャール朝期を迎えることになる。

三、ナーデルによるマシュハドの開発・整備事業

マシュハドは一八世紀初頭のサファヴィー朝崩壊期の混乱で戦場と化す[31]。この混乱の中で登場したナーデルが一七二六年（一一三九 A.H. 年）にマシュハドの支配権を掌握し、以後自身が後に創建する王朝の中心地とすべ

く、この地の開発・整備を試みることになる。以下ではナーデルのマシュハドの開発・整備事業の具体的事例を挙げ、同事業の意図と特徴を検討したい。

（一）水利と君主の居城

まず、マシュハドの都市の基礎インフラの状況と整備について、都市にとって不可欠な水利と、君主の居城とされたチャハール・バーグ一帯、この二つにつき考察したい。

（一）―一　マシュハドの水利

先述の通り、マシュハド付近一帯では廟の創建以降数度に渡り水利システムの再建が行われていることから、水の確保に問題のある場所であったことが分かる。サファヴィー朝崩壊期の混乱はマシュハドにも大きな損害をもたらしたが、この際に再度同地の水利インフラも機能不全に陥ったと考えられ、レザー廟では水場係たちsaqqāyān がラバ二〇頭を利用して郊外から水を運んでいたほど水の確保に問題を有していた。[32] ナーデルはこうした状況を改善してマシュハドの都市機能を回復させるために、近郊のゴレスターンなる枝村 mazra'e-ye Golestān から煉瓦や石で作られた暗渠での二つの水路を建設し、レザー廟及び後述するチャハール・バーグ、さらには市街地への水供給システムを再建した。この水利設備の建設に一四〇〇〇トマン tomān もの莫大な金額がかけられたことは、[33] マシュハドの都市開発の基礎となる水利施設の再建において、支配権力の主導での大規模な投資による工事が不可欠であったことを物語る。このインフラ復興事業により、マシュハドでは安定した水の供給が可能となり、バーグを含めた都市域一帯の発展の礎が改めて形成されていく。

（一）―二　チャハール・バーグ一帯

次に、前近代のイラン地域の都市に共通して存在するバーグについて検討したい。ティムール朝期にレザー廟の北西に設営されたマシュハドのチャハール・バーグは、サファヴィー朝期に至るまで王族らの参詣時の滞在場所や地方行政の拠点として利用されていた。アフシャール朝期になると、このバーグそのものが「王権の本拠 maqarr-e soltanat」、「王権の館 dār al-saltane」、「シャーのチャハール・バーグ Chahār bāgh-e shāhī」[34] などと形容され、その生涯の殆どを征服活動に費やしたナーデル

の存命中にはこの地に代理が配置されて統治に関する諸業務を遂行する場として機能し、彼の没後は君主の居城になると同時に、後継争いの舞台ともなった。

チャハール・バーグに関しては、ナーデル期及びその死の直後に言及する同時代史料には、残念ながらその内部の構成や建物群に関して断片的な記述しか残されておらず、またバーグそのものも現存していない。以上のような制約があるが、ここでは史料中に見える関連する記述を用いて可能な限り同バーグの構成を再現してみたい。当時のチャハール・バーグは、外壁 dīvār によって囲まれ、複数の門を備えていた。史料中でその名が確認できるのは、厨房門 Darvāze-ye maṭbakh、ダフタル・ハーネ門 Darvāze-ye daftarkhāne、アーリー・ガープー（の扉）（dar-e）'Ālī-qāpū、の三つである。[35] そして外壁によって仕切られたバーグ内部には、君主の居城を含め複数の建物が存在した。その中でナーデルによって建設されたものが、史料中でハシュト・ベヘシュト（八天）宮 'emārat-e Hasht beheshṭ[36] と呼ばれる建物である。一五世紀後半以降タブリーズやヘラートなどイラン地域の主要都市におけるバーグには、ひとつの中央の間に八つの部屋が周囲を囲んで連なる形式をもったハシュト・ベヘシュト宮なる同名の建物が建設されている。また、後のサファヴィー朝後期のエスファハーンにおける同名の建物の建設もよく知られている。[37] イラン地域一帯における同名の建物の利用法の先例から推測すると、この建物は謁見等に用いられる壮麗な建物であったと考えられる。[38]

その他のバーグ内の建物としては、ドウラト・ハーネ dowlat-khāne がある。マシュハドのドウラト・ハーネは、歴代の支配王朝の君主らの参詣・行啓の際の滞在場所として利用され、サファヴィー朝期にもその存在と王族による滞在が確認できる。[39] アフシャール朝期には、軍事遠征に明け暮れたナーデル自身のマシュハドでの滞在場所であり、王族らの平時の住まいとして利用されていた。[40] ナーデルは一七二六年（一一三八 A.H. 年）にマシュハドに入った際、この建物の修繕及び床への絨毯の敷き詰めを行っている。[41] 恐らくこの建物はそれまでの混乱で傷んだ状態になっており、自らの滞在場所に相応しい形への整備を行ったのであろう。さらにこの君主の住まいであるドウラト・ハーネの近隣には、後宮の館であるハラム宮 haramsarā が存在していた。[42] 加えて史料からは、エリヤース・ハーン宮 'emārat-e Eliyās khānī なる建物の存在も確認できる。サファヴィー朝後期にエリヤー

ス・ハーンなる人物のマシュハドのベグレルベギ職への就任が史料中に見出せるため[43]、この建物は彼による建設の可能性もあろう。この建物は非常に壮麗な形で建設され、ホール tālār も兼ね備えており、ハシュト・ベヘシュト宮同様に謁見や儀礼などの場としても使用されていたと思われる[44]。実際にナーデル没後の一七五〇年（一一六三 A.H.年）、セイエド・ムハンマド Seyyed Moḥammad がソレイマーン二世 Soleymān-e ṡānī（在位一七五〇年）として君主位に即位した際、この建物が即位式の会場となっている[45]。

そして、チャハール・バーグの前には、先に指摘したゴレスターン村からの水を貯める上下二段重ねの貯水槽 āb-anbār が設置された。この貯水槽の上部には一四個のノズル dahne が取り付けられ、水はそこから建物群の中の複数の溜池 ḥowẕhā を通り、ハシュト・ベヘシュト宮へと引かれ、内部の噴泉 favāre に用いられた[46]。さらにその水は暗渠によってマシュハド市街の通りを経て、レザー廟内の広場へと流される構造となっていた。また、貯水槽の下部の水は人々の慈善へと利用された[47]。加えて先のエリヤース・ハーン宮のホールの向かいには池 daryāche も存在していた[48]。バーグ内部での水をふんだんに用いた池、先述の貯水槽、噴水、さらに住民用の貯水槽の存在は、周辺地域において希少である水に満ちた豊饒な空間をバーグ内部に作り出し、君主の居城に相応しい威容を与えるものとなっていたであろう。加えて、バーグの水環境の整備は、都市の水利インフラと一体化した形で整備が進められていたことが分かる。

そして、王族の宮殿を有したチャハール・バーグに面する形で、メイダーン meydān が存在した。マシュハドの市域内には、同メイダーンに先立つ形で別途旧メイダーン meydān-e qadīm が市域内に存在しており、後述する通りナーデルのワクフ文書にもその地名が見えるが、現存しておらず、当時の位置は不明である[49]。前者のチャハール・バーグに面したメイダーンは、サファヴィー朝後期のワクフ文書に同バーグの建物の前庭 jelowkhāne-ye ʻemārat-e Chahār bāgh という形で登場し、店舗群もその周辺に整備されており[50]、少なくとも前王朝期にはその存在が確認できる。ナーデル期とその直後の史料中において、同バーグのメイダーンは「チャハール・バーグのメイダーン meydān-e Chahār bāgh」[51]、もしくは「ドウラト・ハーネのメイダーン meydān-e dowlat-khāne」などの名称で現れ、後者の事例では、メイダーンはインド

の術語で前庭 jelowkhān であるという説明も加筆されており、これより前庭とメイダーンが同一であることが分かる。[52] 後述するナーデルのワクフ文書中の「ドウラト・ハーネの門の（ところの）新メイダーン meydān-e jadīd-e darb-e dowlat-khāne」なる記述もドウラト・ハーネの前に新しいメイダーンが設置されているという先の説明を裏付けるものとなろう。[53] さらに *'Ālam-ārā-ye Nāderī* においてこのメイダーンは「ナグシェ・ジャハーンのメイダーン meydān-e Naqsh-e jahān」という名で現れる。同史料の記述からは、このメイダーンには先述のアーリー・ガープー及び告時や祝祭の際に音楽を奏でる楽隊演奏所 naqqāre khāne が面していたことが確認できる。[54] このアーリー・ガープーの扉が、このメイダーンと君主の居住区であるバーグをつなぐ役割を果たしていたと考えられる。バーグとメイダーンの結びつきは、サファヴィー朝期においてはタブリーズ、ガズヴィーン、エスファハーンでも見られる一般的な現象であったと言われる。[55] 史料に見えるこれらの点より、マシュハドでは、サファヴィー朝の首都と同様にチャハール・バーグとメイダーンが隣接した形で前王朝期には建設されており、アフシャール朝期にも以前と同じ形を維持し、整備されていたことが窺える。

当時のメイダーンの敷地については、約二〇〇〇名の騎兵が入ったという記述が史料に見えるため、[56] 恐らくはその程度の人員を収容できる広さがあったと推測できる。また、武器の保管[57]や処刑[58]、さらには戦勝を祝う式典の開催や曲芸披露の場所であったことも確認できる。[59] 加えて詳細は後述するが、ナーデルは自らのワクフによりこのメイダーンの一帯に多数の店舗をワクフ財として設定し、商業機能の整備にも配慮している。[60] サファヴィー朝からガージャール朝期にかけてのエスファハーンにおける「王のメイダーン」の事例を踏まえれば、当時のマシュハドのこのメイダーンも公式の儀礼、市場・交換等の場となり、支配者の公正さや偉大なる権力を示す都市の象徴として機能していたと言えよう。[61]

また、バーグにおいては史料から先述の通り「厨房門」なる門の存在が確認できる。同じ名称を持つ門を有していた前王朝のエスファハーンの王宮地区の事例に従えば、この門の周辺に食糧庫、厨房などの調理関連施設が存在したと推測される。[62] さらに史料中にはシャーのダフタル・ハーネ daftar-khāne-ye shāhī の存在が見えるが、[63] この建物はその名を冠した先述の「ダフタル・ハーネ

門」の近くにあったと考えるのが自然であろう。

マシュハドにおいてナーデルは、ティムール朝期に遊牧民的な気質に基づいて設営されたチャハール・バーグの一帯を王宮地区として整備してきたことが以上より窺える。そして、その開発と整備は、前王朝期のエスファハーンをはじめとした首都建設を範としてすでに整備されていたチャハール・バーグ内部や付随するメイダーンなどを活かしながら、王宮地区としての壮麗さと威厳を付加するための改造を施しつつ進められたと言えよう。

（二）都市の記憶の改変
―レザー廟の整備と自らの廟の建設―

サファヴィー朝期のマシュハドは、先に概観した通り王朝が掲げたシーア派の宗教イデオロギーを支える機能を果たすべく、イマーム廟の存在を活かした形で宗教・学術施設、商業インフラの開発が進められた。しかし、ナーデルによるマシュハド開発事業は、都市のさらなる繁栄を目指したと同時に、この都市が帯びるようになったシーア派的な性格にもある程度の変容を迫ることになる。ここでは、都市マシュハドがこれまでに有してきた記憶をナーデルがどのように改変しようとしていたかについて、レザー廟内ならびに自身の廟双方における建設活動から明らかにしていきたい。

（二）―一　イマーム・レザー廟の整備

ナーデルは、第三代イマーム、ホセインの受難劇であるタアズィーエの上演や、シーア派信徒のカルバラーへの埋葬の禁止といった政策で、シーア派の宗教儀礼を一定程度制限したことでも知られる。[64] しかし、レザー廟は当時までにシーア派参詣の目的地として非常に重要なものとなっていたため、ナーデルはその存在をマシュハドの開発に役立てるべく廟の修繕・建設活動を行ったとも指摘される。[65] 彼は一七二六年（一一三九A.H.年）にマシュハドを支配下においた後、廟の新しい塔goldasteの建設に着手した。さらにその際に、すでに存在していたティムール朝君主シャー・ロフの建設による塔と、宰相ミール・アリー・シールが建てたイーヴァーンīvānという二つの建築物につき、金箔の装飾による修繕も行っている。[66]

その後ナーデルはヘラート遠征を行うが、その際に彼はレザー廟への祈願do'āを行ってから戦闘に出立した。[67] そして一七三一年（一一四三A.H.年）にヘラートを征

表1：ナーデルのワクフにおけるレザー廟での受益対象

（Anzābīnezhād, et al.（eds.）, *Bīst vaqfnāme az Khorāsān*, pp. 223–224, 226–227.）

①水場 saqqā-khāne（ヘラートの大理石を移設して新造）	
職員	A：水場長 saqqā-bāshī　1名　給金　8 t、水場係 saqqā　1名　給金　6 t B：ラバ引きの水場係 saqqā-ye rābīye-kesh　4名　給金合計　16 t （B は毎日レザー廟ワクフ地の Bābā Qodrat から水を運搬）
支出	氷　夏期 5 か月間、毎日 30 man 分を購入し使用 蝋燭　毎晩 5 estār 分の溶けた獣脂 pīh-e gedākhte を蝋燭に使用 アーシューラー時　参詣者への飲み物配布　材料費　6 t 他、修繕費やラバの交換費等を支出
②ナーデルの両親の墓地（毎日）200 d を支出	
職員	コーラン読誦者 ḥāfeẓ　2名（給金未記載）
③バーバー・アリー・ベクら 6 名の墓地　毎日 900 d を支出	
職員	コーラン読誦者　6名、絨毯係 farrāsh　1名（共に給金未記載）
支出	蝋燭、お香焚き（詳細未記載）

※略号：t＝tomān、d＝dīnār　　※estār：重量単位、4 ないし 4.5 methqāl と同等

服したナーデルは、祈願での誓約を実行に移す。まず、ヘラートにおいてシャー・ロフにより再建された城塞 arg に設置されていた白い石でできた水場を大砲隊長 tūpchī-bāshī に命じてマシュハドまで運搬させ、廟の広場 ṣaḥn-e moqaddas の水場に据え付けた。[68] そして、このレザー廟の水場 saqqā-khāne は、ナーデルによる先述のワクフの受益対象のひとつとなり、ワクフに際して水場への水供給システムも整備されることになる。[69] このワクフのレザー廟における受益対象をまとめたものが表1になる。[70]

水場に関する受益対象には、水場長と水場係、水運搬係の給金、同所で毎夜点灯する蝋燭の費用、さらに暑い時期の参詣者の慰撫のために水場で消費する氷の購入とアーシューラーの際の飲料の提供費用が確認できる。

以上のレザー廟内での建設活動からは、廟内ではティムール朝期の建設物を重点的に修繕・付加してきたことが分かる。また、アーシューラー時の慈善のワクフ対象への設定は、ナーデルによるシーア派宗教儀礼への制限があくまで限定的であったことを物語る。

その他、イマーム廟における最も重要な設置物のひとつであるレザーの棺を蓋うザリーフ ẓarīḥ（格子）につ

いては、新製こそしなかったが、宝石による装飾を施した鍵を備え付けた。加えて廟内においてカンテラ一四台の設置、絹製の絨毯の敷き詰めによる床の装飾も合わせて行っている。[71]

さらに、彼はレザー廟内に自身の両親 vāledeyn、ならびにナーデルが自らの軍事的な活動を開始した時期に自らがその配下となったバーバー・アリー・ベグ Bābā ʿAlī Beyg ら六名の墓地も設けた。[72] 両親らのレザー廟への埋葬は、シーア派信徒が望むイマーム廟への移葬の習慣に従ったものと言えるだろう。そして、先述の自身のワクフによって、彼らの墓にてコーラン読誦者に朝晩のコーラン読誦を義務付け、給金を収益から支払うよう設定した。

ナーデルのレザー廟への建設活動は、先述の通り都市の参詣地としての側面を強化する狙いもあったと言えよう。加えて史料中にはその建設活動について、歴代諸王朝の君主たちが参詣の記念に足跡となるものを廟に作って残してきたという先例に倣った、という言及がある。[73] 偉大なる君主らの先例に倣い彼も廟内での建設活動を行ったが、その際に留意したのは、シーア派の象徴であるこの廟に、自らの支配の象徴となる建設物を建て、廟内のシーア派の遺産とイランの歴史上の偉大なる君主が残した足跡とをいかに併置するかであったと考えられる。その結果行われたのが、レザー廟内における塔、父祖らの廟の建立、そしてナーデルがその支配・征服活動において手本としたティムール[74]が創建した王朝に関連する建設物の修繕・付加であったと指摘できる。このことは、シーア派の参詣地として多くの信徒が訪れる同廟において、ナーデルに関連する記憶及びティムールとその王朝の後継者であるという彼自身の姿勢、この二つを視覚的に強調し、自身の支配者としての姿勢の明確化を狙うものであったと言えよう。

（二）―二　ナーデル廟の建設と慈善

ナーデルは存命中に自らの廟を二つ建設している。ひとつは自身の故地に近いキャラート Kalāt に建設されたが、もうひとつはマシュハドのチャハール・バーグの脇に建てられたものであり、一七三二―三三年（一一四五 A.H. 年）に完成した。[75] 以下、マシュハドの彼の廟につき、諸史料に見える記述からその構成を可能な限り明らかにしたい。その墓地は広い敷地を有し、その中にレザー廟の天蓋に向かい合う形で二つの天蓋が建設され、ナーデ

表２：ナーデルのワクフにおける自身の廟での受益対象一覧
（Anzābīnezhād, et al.（eds.）, *Bīst vaqfnāme az Khorāsān*, pp. 224–225, 227.）

職員	従者 khādem　２名　給金合計　12 t 庭師 bāghbān　２名　給金合計　8 t 告時師 mo'azzen　２名　給金合計　7 t コーラン読誦者　４名　給金合計　24 t 水場係　（１名）　給金合計　150 d（水の運搬） ランプ係 cherāghchī　（１名）給金合計　2 t
支出等	蝋燭　毎朝晩 10 estār 分相当の４本の蝋燭を点灯 香　琥珀製燭台 fatīle-ye 'anbar のために１日 100 d を支出 氷　夏期５か月間、毎日 10 man 分を使用 ランプ　２つの尖塔と墓の扉の所の水場のカンテラ 16 台の明かりの油 10 estār 分 金曜晩の慈善　来訪した貧者へのナーン　年間総額　7 t 2000 d 絨毯／金糸織カーテン　1〜5 年毎に交換し、古いものの売却代金は貧者に分配 ※ワクフ財からの収入が支出を上回った場合、剰余分を貧者に分配

※略号は表１と同じ

ル自身と息子のレザー・ゴリー Reẓā Qolī（一七四七年／一一六〇 A.H. 年没）の墓所が設けられていた。[76] 廟自体は良質の煉瓦と漆喰 khesht va gach によって非常に壮麗な形で建設され、建物の構造としては廟に四つの建物 khāne が連なる形を取り、二つの廊下 rāhrow、二つのイーヴァーン、二つの扉 darb が存在したと伝えられる。[77] さらにナーデルは一七四〇年（一一五三 A.H. 年）の中央アジア遠征で獲得したサマルカンドのティムールの墓石とマドラサの扉を自身の廟に据え付けることを決め、実際にマシュハドまで運搬させている。しかし、実際にはこの墓石と扉はティムールへの敬意から設置されることなく、サマルカンドへと返送された。[78] 加えて、自身の棺は宝石での装飾を施した三〇〇〇トマンを超える価値を持つ壮麗な鉄製のザリーフにて覆われる予定であった。[79] 廟の敷地内部には水場が設置され、東側にはイラン北西部マラーゲ Marāghe 産の大理石製の門が設置されていたという。[80]

そしてこの廟も、先述のナーデルによるワクフの受益対象に含まれている。表２は受益対象の一覧を示したものである。[81]

特筆すべきは庭師への給金の支払いの設定であり、こ

こから敷地の内部にバーグも兼ね備えていたと推定される。バーグの中に君主の廟を建立する形式は、セルジューク朝期以降にトルコ・モンゴル系の諸王朝の支配者らの埋葬の際に見られるようになると言われる。しかしサファヴィー朝では、同王朝の王族の遺骸についてはイマーム廟であるレザー廟やレザーの妹が眠るイマームザーデであるゴムのマアスーメ廟等への埋葬が一般化し、埋葬スタイルに変化がみられた[82]。他方、前近代インドの支配者一族は、トルコ・モンゴル系の遊牧王朝の伝統を継承し、バーグの内部に廟を建設する形式を採用するケースが多く見られた[83]。そのバーグの存在の可能性から、ナーデル廟はサファヴィー朝以前のトルコ・モンゴル系の遊牧王朝の慣例に従った形式を有していたと推測される。

そして、ナーデルのワクフには、自身の廟の管理を担当する従者の給金、廟の維持管理や慈善活動に関する費用の支出の指定も含まれ、先述の庭師の他、告時師やコーラン読誦者といった他の廟でも見られる職員の給金の支払いが規定された。また、廟の内部に関しては、蝋燭、香の費用、及び絨毯、扉用のカーテンの交換費用の支出も定められた。加えて、廟での毎週金曜の貧者に対するナーンの配布、暑い時期に消費する氷の購入、さらに廟の廊下やイーヴァーン等に敷く絨毯、カーテンについては一～五年で交換の上、古いものは売却してその収入を貧者に分配するといった、廟を貧者・参詣者への慈善の舞台として機能させる規定も見られた。

一四世紀以降の前近代イラン地域のスンナ派王朝の君主が、自らの廟を宗教学院、病院などを含んだ宗教慈善複合体として建設し、その維持のためにワクフ制度を用いた事例が確認されている。イルハン朝のガザン・ハンやオルジェイトの廟はその最たるものであろう[84]。ナーデル廟の建設は、上述の通りワクフによって慈善的な機能が付与されている点では、彼ら先王の伝統を踏襲したものと言えるが、慈善面ではその規模が比較的小さく、宗教学院などの学術施設が皆無な点で相違も見える。後者に関しては、前王朝期に勢力を振るったシーア派ウラマーへの抑圧[85]が関係していると考えられる。

このナーデル廟の建設の意図としては、遊牧政権の伝統に則ったバーグを備えた自らとその後継者の廟をレザー廟と同等の規模で建設し、マシュハドにシーア派イマームの権威に比肩する形で自らの記憶を刻み込もうとしたものであったと言えよう。さらに、ナーデルは廟でのコーラン読誦のような聖性の演出や一定程度の慈善をワ

クフによって永続的に実施されるよう手配し、被葬者となるナーデルが公正かつ慈愛溢れる人物であったという印象を都市民たちに未来永劫に渡って与えることで、自ら及びその没後に続くと考えていた支配王朝としてのアフシャール朝の権威をこのシーア派の参詣都市において先々に渡り誇示しようとしていたと考えられる。

（三）マシュハドにおける商業振興策
―ワクフを通じた商業インフラへの関与強化―

レザー廟周辺での商業施設の整備は先述の通りガズナ朝期には早くも行われているが、その規模は決して大きいものではなかったと思われる。その後、サファヴィー朝のシーア派化政策の中でレザー廟の重要性が高まる中で、先述の通り多数の店舗や隊商宿といった商業インフラの整備も進められ、マシュハドは商業面でも中央アジア、インド方面を結ぶルート上の一大拠点と化していくことになる。[86]

ナーデルもマシュハドの繁栄のために、自身のワクフによってマシュハド市内に総計一七八軒 bāb にも及ぶ店舗を購入した上でワクフ財に設定した。加えてワクフ管財人職 towliyat を自らの一族が継承するよう定めるこ

とで、[87]ワクフを通じた形での商業インフラへの関与・管理を王族となる自らの後裔による永続化も視野に入れて強化していく。このナーデルの商業インフラのワクフ財化とその整備は、都市の二つの区画に重点を置いて行われた。商業インフラに関するワクフ財をまとめたものが表3である。

商業施設のワクフ設定が行われた場所のひとつには、先述のチャハール・バーグのドウラト・ハーネの門に接した新メイダーン周辺がある。このメイダーンには、二九軒の店舗がワクフ財として設定された。店舗の業種としては、同業種の店舗が複数あるケースは食糧雑貨商四軒、パン屋四軒、菓子屋二軒、靴製造業二軒、飼料商二軒である。残りはタバコ商 tanbakū-forūshī などひとつの業種につき一軒のみとなっており、特定の業種への偏りは見られない。新メイダーンにおける店舗群は、他の店舗群の構成が不明であるという問題も残るが、このメイダーン自体がバーグという君主の居城に接するという位置関係や、後述するメイダーンに附属したバーザール bāzār-e meydān の一帯に熟練した技術を必要とする業種の店舗がより多くワクフ財に設定されたことを鑑みれば、前王朝のエスファハーンの王のメイダーン一帯と同

表3：ワクフ財としての商業施設一覧

(Anzābīnezhād, et al. (eds), *Bīst vaqfnāme az Khorāsān*, pp. 218–222.)

所在地	店舗数 bāb	備考 (店舗の種別、特徴等　※基本的に店舗数の多い業種順に記載)
①ドウラト・ハーネの門に位置する新メイダーン meydān-e jadīd の店舗群	29	・コーヒーハウス qafvekhāne (門の所に位置、下記店舗とは分けて記載) ・食料雑貨商 baqqālī　4 軒、パン屋 khabbāzī　4 軒、 菓子販売業 ḥalvā'ī　2 軒、靴製造業 kafshdūzī　2 軒、 飼料商 'allāfī　2 軒、鞍製造業 sarrājī、垢すり業 dallākī、 真鍮道具製造業 davātsājī、帽子製造業 kolāhdūzī、 両替商 sarrāfī、陶器商 sefalforūshī、縦糸製造業 faratmālī、 香料商 'aṭṭārī、精肉業 qaṣṣabī、タバコ卸売業 tanbākūforūshī、 炒り豆業 nokhodbarīzī、搾油業 'aṣṣarī、蝋燭商 shammā'ī、 染物業 ṣabbāghī
②旧メイダーン meydān-e qadīm の店舗群	29	・梳綿業 ḥallājī　5 軒、パン屋　4 軒、菓子屋　3 軒、 搾油業　2 軒、飼料商　2 軒、食糧雑貨商　2 軒、 染物業　2 軒、精米業 razzāzī、タバコ卸売業、香料商、 蝋燭商、鞍製造業 sarrājī[88]、仕立屋 khayyāṭī、 捺染業 chītsāzī、ゲリーム織り lavvāfī、陶器商
③チャハール・スーグとバーザールに附属したメイダーン chahār sūq va meydān-e bāzār の店舗群	120	・チャハール・スーグ　12 軒（業種は未記載） 内訳：名称未記載の建物の上部の部屋 ḥojre　8 軒 同スーグの角の箇所　4 軒 ・その他の店舗 鞍製造業　23 軒、アラブ服縫製業 'arabīdūzī　10 軒、 ろくろ業 kharrāṭī　10 軒、帽子製造業　9 軒、 タイル商 kāshīforūshī　6 軒、手桶縫製業 dalvdūzī　6 軒、 皮革縫製業 charmdūzī　6 軒、靴製造業　3 軒、 ブーツ製造業 khoffāfī　3 軒、香料商　2 軒、仕立屋　2 軒、 梳綿業　3 軒、古道具屋兼針造り semsārī va sūzangarī　2 軒、 ゲリーム織り　2 軒、蹄鉄製造業 na'lchegarī、 箱製造業 sandūgsāzī、組紐造り 'alaqebandī、 荷鞍製造業 pālāndūzī、木材商 chūbforūshī、 銅細工業 mesgarī　2 軒、鍛冶業 ḥaddādī、鋸造り arregarī、 鋳物造り rīkhtegarī ・他業種未記載の店舗計　12 軒

じく、バーグに滞在する王族の生活を支えるため商業空間であったと推測できる。[89] そして、ナーデルによるその店舗群のワクフ財化は、こうした重要性を持つ場所に位置する商業インフラへの王権による管理の強化を意図するものであったと考えられる。

そして、この新メイダーン周辺のワクフ財としての店舗の中で異彩を放つのは、コーヒーハウス qahvekhāne である。コーヒーハウスは、イラン地域にコーヒーが到来したと言われる一七世紀初頭以降、主要都市に建設されている。エスファハーンでも一七世紀初頭には王のメイダーンにこの施設が建設されていた。最初期のコーヒーハウスは男娼の存在などいかがわしい場所としても知られたが、後に規制される一方で、知識人、芸術家、高官らが集う文化的な場としての役割をも果たし、情報の交換の場として賑わっただけでなく、ウラマーの演説・説教や、『王書 *Shāhnāme*』をはじめとした詩や歴史講話が語られる場としても発展した。[90] そして時には君主自らコーヒーハウスに足を運び、客との会話を楽しみ、さらには外国からの使節との会見を行うこともあったという。[91] ホラーサーン地域にもコーヒーは一七世紀末には到来しており、[92] 同時期にはすでにマシュハドにおけるコーヒーハウスの存在も伝えられ、文書史料中にもワクフ財としての存在が確認できる。[93] そしてナーデルも、前王朝の首都エスファハーンのメイダーンと同様に、マシュハドのチャハール・バーグに併設した新メイダーンにおいてコーヒーハウスをワクフ財に設定している。このコーヒーハウスはワクフ文書において同バーグのメイダーンの店舗群 dakākīn の中でその他の店舗とは独立した形で記載されていることから、この施設はメイダーン一帯のワクフ財の店舗の中で特別な存在であったと言えよう。[94] ナーデルによるコーヒーハウスのワクフ財への設定と整備は、彼が先行するサファヴィー朝後期にコーヒーハウスが有していた文化的な機能を理解しており、その存在によってメイダーン一帯における人の往来の活性化による繁栄を期待したのみならず、マシュハドの都市文化の発展を上から促す意向も有していたことを示すものであろう。

その他ナーデルのワクフ財として多数の商業施設が置かれた場所としては、先述の旧メイダーンがある。この旧メイダーンには二九軒の店舗がワクフ財として設定されている。[95] この二九軒は恐らくメイダーンに面した形での店舗であったと考えられる。ワクフ財としての店舗の

業種については、パン屋、菓子屋、食料雑貨商など比較的日常生活に直結したものが多いと言える。

そして、さらにこのメイダーンには上記の店舗群の他に、メイダーンに付属したバーザールに一〇八軒、その近郊に位置したと思われるチャハール・スーグ chahār sūq（四辻のバーザール）[96]に一二軒、合計一二〇軒にも及ぶ多数の店舗がワクフ財として設定されている。ナーデルのワクフによるマシュハドにおける店舗・商業インフラの設定は、一二〇軒という数が示す通りこの地域一帯に最も集中して行われている。前者におけるワクフ財の店舗の種類については、鞍製造業の二三軒を筆頭に、アラブ服縫製業、ろくろ業が共に一〇軒など、特定の業種への偏りが見られる。さらに文書中にてこれらのワクフ財の店舗の位置関係を説明する際に、「銅細工師たちのバーザール bāzār-e mesgarān」「鍛冶屋のバーザール bāzār-e ḥaddād」といった記述が見えることから、旧メイダーンのバーザール一帯は専門店街であったと考えられよう。[97]店舗群の業種の偏りとその専門性の高さから想起するに、恐らく当時のマシュハドにおいては、同じく新旧のメイダーンを持つエスファハーンと同様、この旧メイダーンの周辺域が職人が集う真の市場としての重要性を持っていた場所なのであろう。[98]ナーデルは恐らく以前から専門店街となっていたこの一帯をも商業地区として重視し、その店舗の一部をワクフ財化して関与と管理を強めることで、支配権力の主導による都市の商業的な繁栄を目指したと考えられる。

ナーデル期のマシュハドについては、欧人商人がブハラ、バルフ、インドなど各地から人が集まり、そのバーザールは大きく、物資に満ち溢れていたとの記録を残している。[99]こうした繁栄には、彼自身のワクフによる商業インフラへの関与・管理強化が一役買っていたことは想像に難くない。そして、こうした店舗群等からなるワクフ財からの利益が還流されたのは、上述通りレザー廟、そして同廟に埋葬されたナーデルの父祖らの墓、そして彼自身の廟であり、運営・維持管理の財源の恒久的な確保がワクフによって保障されるようになっていた。このワクフは、都市マシュハドの商業的な繁栄を、レザー廟におけるシーア派信仰の一定程度の保証、及び新たなる王朝の支配者とその一族らの死後の聖化と権威の構築に強く永続的に結びつけることを狙ったものであったと言えよう。

（四）都市マシュハドへの移住政策
―アルメニア人の事例から―

ナーデルはその軍事遠征の中で、領地の各地から多数の部族民の徴発や強制移住を行ったことで知られる。特に領地の西部地域一帯を拠点としていた多数の部族をホラーサーン一帯の各地に強制移住させ、辺境防衛や農作業などに従事させた[100]。その中で都市マシュハドの市域内に強制的に移住させられたのが、アルメニア人とユダヤ教徒である。以下、その事情がある程度把握できるアルメニア人の移住の経緯を追い、その背景につき検討したい[101]。

アルメニア人に関しては、サファヴィー朝期におけるイラン各地への強制移住が知られている。最も有名なものは一七世紀初頭シャー・アッバース期におけるアゼルバイジャンからエスファハーンの新ジョルファー地区への強制移住であり、その後彼らがこの都市を中心に世界的な商業ネットワークを構築し、王朝の経済的な繁栄の一端を担う役割を果たした。また彼らは当時ハマダーン、アラーク近郊、ギーラーンとマーザンダラーン、ガズヴィーン、シーラーズ等でも共同体を形成していた[102]。

マシュハドではサファヴィー朝期までにアルメニア人が共同体を形成することはなかった。しかし、ナーデルは一七三四年（一一四七A.H.年）のアゼルバイジャン方面への軍事遠征の際に、地域の多数の住民・部族を徴発し、同地一帯に暮らすアルメニア人の家族一〇〇〇戸に対してマシュハドへの強制移住を命じた。ナーデルは彼らの強制移住にあたり、エスファハーンの新ジョルファーを手本とし、市内の下通り khiyābān-e sefli の一角に居住区を設け、この地に家屋のみならず、キリスト教信仰を保証するための教会も建設し、彼らを住まわせた[103]。このことからナーデルはマシュハドにもサファヴィー朝後期のエスファハーンにおける新ジョルファーと同様のアルメニア人居住区の建設を意図していたと言える。マシュハドへのアルメニア人の移住と居住区の建設も、バーグの事例と同様に、エスファハーンに類似した形でのマシュハド開発を推進するものであったと言えよう[104]。

しかし、マシュハドに居を構えたアルメニア人たちの居住区一帯は、その後周囲の街区とは異質な様相を呈していく。彼らの信仰を保証するために建設された教会の周辺では、さらなる偶像寺院 bot-khāne（教会）や、酒場群 khomkhānehā va sharbatkhānehā までもが立ち並び、楽器や歌手による音楽の演奏、男女の姦通 zanā-ye

moḥṣane-ye mard va zan が行われ、さらには無情な臣民の不正、スーフィーによる不誠実な行動などが見られるようになり[105]、イスラーム的な公正さと倫理感に欠けた治安の良くない歓楽街と化していく。恐らくこの一帯はアルメニア人の居住により、周辺とは異なった形で発展を遂げ、地元住民のみならず長旅を経てマシュハドを訪れた多数の参詣者らにとっての非日常的な歓楽の場へと変貌していったと考えられる[106]。

四、おわりに

以上、ナーデルによるマシュハドの開発事業につき、具体例を挙げながらその意図について検討してきた。本稿で明らかにしてきた点について改めてここで整理したい。

イマーム・レザー廟が所在した一帯は、イラン地域における一四世紀以降のサイイド崇敬の深化の中でマシュハドの名を冠して都市開発が進められ、サファヴィー朝期のシーア派化政策により発展していった。そして、一八世紀に新たなる支配者として登場したナーデルは、上記のような宗教的な潮流の変化の中で発展してきた都市マシュハドを支配の中心地に定める。そのナーデルによる都市マシュハド開発政策の特徴としてまず指摘できるのは、この都市の開発事業がサファヴィー朝の首都開発、特にエスファハーンにおける開発・建設事業に基づき展開されている点である。先行研究では簡潔かつ不十分な指摘に留まるその類似性の具体的諸相については、まず前王朝期までにエスファハーンの王宮地区一帯と類似した構造を有するようになっていたと考えられるチャハール・バーグ一帯に関し、ナーデルはその構造を維持した形で開発・整備を進め、さらに市街地ではワクフによる新旧二つのメイダーンにおける商業インフラへの関与強化と整備、そしてアルメニア人の市内への移住と街区建設等を行ってきたことが指摘できる。これよりナーデルは、前王朝以来マシュハドが有していたエスファハーンの王宮地区に似た構造を活かした形で都市の整備事業を進め、サファヴィー朝の首都開発の伝統を受け継ぐことで、マシュハドの繁栄と内外に対する自らの権威の誇示を目指していたことが窺える。

加えて彼はマシュハドの開発に際して、レザー廟内部の建設・修復も進めた。この事業はマシュハドが維持してきたシーア派の伝統を尊重する姿勢を示すものでありながら、実際には廟内においてティムール朝に関連する

遺産の修復や自身の父母の廟の設置により、レザー廟というシーア派の象徴の中でナーデル自身と自らが征服活動の手本とした王朝の記憶の強調を試みていた。加えて、レザー廟にも比肩する威容を備えた自らとその子孫らの廟を遊牧王朝の伝統に則った形で建設し、この都市に自らの記憶をさらに強く刻み込もうとした。そして、これら二つの廟を受益対象に慈善事業も含んだワクフを設定し、支配の中心たる都市の象徴としての両廟の永続的な管理にも配慮することで、マシュハドにおけるシーア派と、自身が範とするティムール朝、そしてナーデル自らの記憶の恒久的な維持を意図したのである。

以上から、ナーデルによるマシュハドの開発事業は、この都市がそれまでに培ってきたシーア派の伝統の中において、ティムール朝の遺産を強調し、サファヴィー朝後期における首都エスファハーンの建設計画を追従することで、過去のイラン地域における支配王朝の伝統を重視し再現する形を取るものであった。そしてこの支配の象徴となる都市に、さらに自らの廟の建設等によって自身の記憶を刻み込むことで、イラン地域が過去に歩んできた諸王朝の歴史や宗教的な伝統の上に自らの足跡を位置づけ、自身そしてその後継者たちが維持するであろう王朝の権威の確立と永続化を目指したものであったと評価できよう。

最後に、自身とその一門の記憶をマシュハドに刻み込もうとしたナーデルの思惑は、自らの没後すぐに脆くも崩れ去った点を指摘しておきたい。ナーデル自身は先述の通り、その死後に自らの廟内部の棺の安置場所をザリーフで覆う予定を立てていた。しかし、このザリーフは実際にナーデルの死直後の後継者であるアリー・シャー'Alī Shāh（在位一七四七―四八年／一一六〇―六一A.H.年）の統治期にナーデル廟に設置されることはなく、レザー廟にワクフされて設置されることになり、ソレイマーン二世の治世にこの決定が実行されることになる。[107] そして、アリー・シャーもレザー廟の北側に壮麗な自身の廟の建設を試みたが、没後にその遺志は果たされることなく、彼の遺骸は同廟附設の墓地となっていたガトルガーフ qatlgāh 地区へと埋葬されてしまう。[108] ナーデルの暗殺直後に外部勢力も加わる形で進んだ政治的混乱の中で、彼がマシュハドに残そうとした自らとその一門の記憶は、後継者として名乗りを上げた自らの子や孫らにとって、すぐに利用価値の乏しいものと化していく。

そして、ガージャール朝成立後の一八〇四―〇五年（一二一九A.H.年）に、このナーデル廟は完全に破壊され、[109] さらにチャハール・バーグも一八三四年（一二五〇A.H.年）頃には荒廃し、街区へと転換されたことが指摘されている。[110] 一九世紀にはナーデル期のマシュハドに支配の中心地としての威容を与えていたバーグと自らの廟がこの都市から消え去り、ナーデル自身の記憶もマシュハドから一掃される。

しかし、その後ナーデル廟は一九一七年にガヴァーモッサルタネ Qavām al-Saltane によりマシュハドの市街地に再建されることになる。さらに一九六三年には歴史遺産協会 Anjoman-e āṯār-e melli により改修され、現在ではナーデルの巨大な像が置かれると共に、博物館も併設されている。こうした近現代におけるナーデル廟の再建事業は、イラン国民国家の形成に向けての歴史の再構築の中で、ナーデルの記憶が改めて必要とされる事態に直面したがゆえのことであろう。

註

（1） 前近代イラン地域を支配した遊牧王朝では、多くの場合遊牧的な慣習に従い固定的な首都を有さず、移動を続ける君主の滞在している場所が事実上の首都であった。同地域におけるこうした遊牧王朝と首都の関係については、後藤裕加子「サファヴィー朝後期のシャーの移動と「統治の都」」『人文論究』六四巻二号、二〇一四年、二九―三一頁にて先行研究における問題の所在が簡潔にまとめてある。ナーデルはマシュハド、及び自身のもうひとつの墓地の建設地であるキャラートを中心としたホラーサーン地域を自身の支配の中心地として定める意向を有していたが、特定の都市を首都とすることなく、先行する遊牧王朝の君主の慣習に従い、自らがいる場所、すなわち自らの遠征中における軍営地を首都であると見なしていた。こうしたナーデルの遊牧的心性と首都に関する考え方の考察としては、Tucker, Ernest, S., *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, Gainesville: University Press of Florida, 2006, pp. 68–72 を参照のこと。

（2） 羽田正「牧地都市と墓廟都市―東方イスラーム世界における遊牧政権と都市建設―」『東洋史研究』四九巻一号、一九九〇年、一―二九頁。

（3） マシュハドと同様に、地域における宗教性のあり方の変化が、聖廟の政治的重要性を向上させ、廟一帯の都市化を促した土地としては、一一世紀に「発見」された「アリー廟」を有する現アフガニスタン北部のマザーレ・シャリーフ Mazār-e Sharīf を指摘できる。この地はサイイド信仰の深まりの中で周辺の都市化が促され、ついには旧来の地域の中心都市だったバルフ Balkh を凌駕していく（McChesney, R. D., *Waqf in Central Asia : four hun-*

Inc., 1973, p. 197)。タッカー氏は、註(1)での言及に加え、マシュハド近郊が彼の生誕地であったことを指摘する（Tucker, *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, p. 68)。

(7) アフシャール朝期のマシュハドに関する現地イランの研究としては、Mokhlesī, Moḥammad ʻAlī, "Mashhad-e pāytakht-e Afshāriyān", in Moḥammad Yūsof Kiyānī (ed.), *Pāytakhthā-ye Īrān*, Tehrān : Sāzmān-e mīrāṣ-e farhangī-ye keshvar, 1374kh., pp. 621–648があるが、当時の同都市についてはバーグ及びナーデル自身の廟の建設事業の簡潔な指摘を含むのみである。また、マシュハドのチャハール・バーグに特化した研究として、Ḥoseynī, Seyyed Hāshem, "Chahār bāgh-e Mashhad-e Tīmūrī dar ā'yīne-ye tārīkh", in *Pazhūheshhā-ye tārīkhī*（*ʻElmī-pazhūheshī*）, *Dāneshkade-ye adabiyāt va ʻolūm-e ensānī, Dāneshgāh-e Esfahān*, 1389 kh., pp. 73–88があり、またアフシャール朝期における同バーグについては Seyyedī, Mehdī, *Sīmā-ye tārīkhī-farhangī-ye shahr-e Mashhad*, Tehrān : Āvām, 1382kh., p. 61にも簡単な言及がある。前者はアフシャール朝期の同バーグとメイダーンに基づき、本稿でも言及するマシュハドの都市計画のエスファハーンとの類似性を示唆するも、バーグ、メイダーンの全容の把握や、当時これらの場が果たした役割の考察が不十分である。後者はバーグのみからエスファハーンとの類似性をごく簡単に指摘するに留まっている。

(8) さらに付言すれば、サファヴィー朝以降のマシュハド

dred years in the history of a Muslim shrine 1480–1889, Princeton : Princeton University Press, 1991)。

(4) マシュハドの概説的な通史としては Seyyedī, Mehdī, *Tārīkh-e shahr-e Mashhad*, Tehrān : Enteshārāt-e Jāmī, 1378kh. がある。また、ホラーサーンに関する事典 ʻOṭāredī, ʻAzīz Allāh, *Farhang-e Khorāsān*, Mashhad : Enteshārāt-e ʻOṭāred, 7vols, 1381kh. の一巻目が都市マシュハドの歴史と現在を扱っている。但し、後者には典拠が付されていないため、利用には注意が必要である。

(5) サファヴィー朝初期の都市マシュハドにめぐる専論として、守川知子「サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド――一六世紀イランにおけるシーア派都市の変容――」『史林』八〇巻二号、一九九七年、一一四―頁、Farhat, May, "Shi' i Piety and Dynastic Legitimacy : Mashhad under the Early Safavid Shahs", in *Iranian Studies*, 47–2, 2014, pp. 201–216、また同王朝後期のレザー廟くのワクフに関しては、拙稿「サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザー廟のワクフ」『日本中東学会年報』一二六巻一号、二〇一〇年、九九―一三五頁がある。

(6) マシュハドが重要視された理由について、ロッカート氏はナーデルにとって自身が征服を意図していたイラン、中央アジア、インド各地域の中心に位置し、さらにエスファハーンよりもサファヴィー朝の伝統に縛られない土地であったことを述べる（Lockhart, Laurence, *Nadir Shah ; A Critical Study Based Mainly upon Contemporary Sources*, London : Luzac & co., 1938, repr. New York : AMS Press

の都市計画は、同時代以降の南インドのシーア派政権の都市整備に影響を与えたとの指摘もある（Rīvzi, Saiyid Athar Abbas, *A Socio-Intellectual History of the Isnā ʻAsharī Shīʻīs in India*, vol. 1, Canberra : Maʻrifat Publishing House, 1986, p. 305）。サファヴィー朝治下のイランの都市と、インドのシーア派政権下の都市計画の比較研究も今後考えられよう。

（9） Marvī, Moḥammad Kāẓem, *ʿālām-ārā-ye Nāderī*, Moḥammad Amīn Rīyāḥī (ed.), Tehrān : Nashr-e ʻelm, 3vols, 1374kh. 本史料はナーデルの財務官僚が著した史書で、特に当時の都市社会に関して他の年代記には見られない独自の記述を含む点で利用価値が高い。

（10） Solṭān Ḥāshem Mīrzā, *Zabūr-e Āl-e Dāvud*, ʻAbd al-Ḥoseyn Navāʾī (ed.), Tehrān : Mīrās-e maktūb, 1379kh., Marʻashī, Mīrzā Moḥammad Khalīl, *Majmaʻ al-tavārīkh*, ʻAbbās Eqbāl (ed.), Tehrān : Ketābkhāne-ye ṭahūrī va Ketābkhāne-ye sanāʾī, 1362kh., Golestāne, Abū al-Ḥoseyn b. Moḥammad Amīn, *Mojmal al-tavārīkh*, Modarres Raẓavī (ed.), Chāpkhāne-ye sherkat-e ṭabʻ-e ketāb, n. d.

（11） 本稿にてこのナーデルのワクフ文書（レザー廟図書館蔵）を参照するにあたっては、その翻刻を掲載する Anzābīnezhād, Reẓā, et al.（eds.）, *Bīst vaqfnāme az Khorāsān*, Mashhad : Bonyād-e pazhūheshhā-ye eslāmī, 1388 kh., pp. 214–31 を利用した。その他の翻刻として、Navāʾī, ʻAbd al-Ḥoseyn (ed.), *Nāder Shāh va bāzmāndegān : hamrāh bā nāmehā-ye salṭanatī va asnād-e siyāsī va edārī*, Tehrān : Enteshārāt-e zarrīn, 1368kh., pp. 429–442 があるが、この翻刻にはワクフ財に関する記述が欠落している。ガージャール朝期に作成された同文書の写しは、*Ketābche-ye Monqūfāt-e Āstān -e Qods-e Raẓavī*, Ketābkhāne-ye Āstān-e Qods-e Raẓavī, MS. No. 8557, fols. 45–54 に見える。また、同王朝末期に作成された同文書の要約が Ṣādeq al-Dowle, Mīrzā Moḥammad Reẓā, *Āṣār al-Raẓwīye*, chāp-e sangī, 1317A.H., pp. 159–162 に掲載されているが、先の写しと異なる箇所もある。

（12） ナーデルの征服者、支配者としての経歴を詳細に考察したタッカー氏も、マシュハドへの施策について簡単に触れている（Tucker, *Nādir Shāh's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, pp. 67–72）が、ワクフへの言及はない。なお、ナーデルのワクフ文書を考察対象とした現地イランの研究としては、Kadkanī, Reẓā Naqdī, "Mowqūfāt-e Nāder Shāh va ʻAlī Shāh Afshār dar Mashhad-e Moqaddas", in *Mīrāṣ-e Jāvīdān*, 46, 1383kh., pp. 84–93、及び Birjandī, Moḥammad Taqī Sālek, "Āshenāī bā Mowqūfe-ye Nāder Qolī Khān Afshār", in *Mīrāṣ-e Jāvīdān*, 50, 1384kh., pp. 72–103 の二つがある。前者は後述する後継のアリー・シャーのワクフも合わせた形での紹介であり、後者はナーデルのワクフ財であった枝村及び管財人職のその後の展開等につき検討を試みている。

（13） Farhat, "Shīʻī Piety and Dynastic Legitimacy : Mashhad under the Early Safavid Shahs", pp. 202–204 では、サファヴィー朝以前のレザー廟、マシュハドの歴史が簡潔にま

とめられているが、地域の宗教性の変化の中での廟の重要性の向上にのみ焦点が当てられている。本稿の第二章ではマシュハドの都市形成における建設活動の具体例の提示という視点に立ってアフシャール朝までの都市の歴史を簡単に振り返ることにする。

(14) Farhat, May, *Islamic Piety and Dynastic Legitimacy : The Case of the Shrine of Ali al-Rida in Mashhad* (*10th-17th Century*), Unpublished Ph. D. Thesis, Harvard University, 2002, pp. 40–41.

(15) この外壁ないし土塁についてはイブン・ハウカルの記述に見えるBarthold, W., *An Historical Geography of Iran*, Svat Soucek (tr.), C. E. Bosworth (ed.), New Jersey : Princeton University Press, 1984, p. 105)。

(16) 廟のある地域の地名は当初ノウガーンNowghānと呼ばれていたが、一四世紀前半期から徐々にマシュハドの呼称にとって代わられるようになる(Streck, M., "Mashhad", in P. Bearman et al. (eds.), *Encyclopaedia of Islam*, 2nd edition, vol. 6, 1991, p. 714)。

(17) このワクフについては、Mowlavī, 'Abd al-Ḥamīd, "Farhādgerd", in *Nāme-ye Āstān-e Qods*, 33&34, 1347kh., pp. 120–130を参照のこと。

(18) Ḥāfeẓ Abrū, *Zobdat al-Tavārīkh*, Seyyed Kamāl Ḥājj Seyyed Javādī (ed.), Tehrān : Sāzmān-e chāp-e enteshārāt-e vezārat-e farhang va ershād-e eslāmī, Nashr-e ney, 1372 kh., vol. 2, p. 693.

(19) Samarqandī, Dowlatshāh, *Taẕkerat al-sho'arā*, Edward Brown (ed.), London : Luzac, 1901, repr. Tehrān : Asāṭīr, 1382kh., p. 506. 恐らく先の時代の水路とは別に、新たに敷設されたものと思われる。

(20) 前者については、守川知子「サファヴィー朝支配期の聖地マシュハド」九頁、後者についてはMonajjem, Jalāl al-Dīn, *Tārīkh-e 'Abbāsī ya Rūznāme-ye Mollā Jalāl*, Seyh Allāh Vaḥīdniyā (ed.), Tehrān : Enteshārāt-e vaḥīd, 1380 kh., p. 218を参照。

(21) 拙稿「サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザー廟のワクフ」一一六―七頁。

(22) Qommī, Qāẓī Aḥmad, *Kholāṣat al-tavārīkh*, Eḥsan Eshrāqī (ed.), Tehrān : Enteshārāt-e Daneshgāh-e Tehrān, vol. 1, 1359kh., p. 609.

(23) Monshī, Eskandar Beyg, *Tārīkh-e 'Ālam-ārā-ye 'Abbāsī*, Īrāj Afshār (ed.), 2nd Edition, Tehrān : Enteshārāt-e Amīr-e Kabīr, vol. 2, 1382kh., p. 854.

(24) *Tārīkh-e 'Ālam-ārā-ye 'Abbāsī*, p. 854, *Tārīkh-e 'Abbāsī yā Rūznāme-ye Mollā Jalāl*, p. 328. なお、この水路の水利権のワクフについては、拙稿「サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザー廟のワクフ」一一一頁。

(25) サファヴィー朝後期のワクフ文書からは、市街地の多数の商業施設がワクフ財となっていることが窺える。その中でも大規模なものとして、一六六七年(一〇七八A.H.年)のアッバース・ゴリー・ハーン'Abbās Qolī Khānによるワクフにおいて、店舗が一〇〇軒規模でワクフ財とされている事例がある(拙稿「サファヴィー朝後期に

おけるイマーム・レザー廟のワクフ」一二二頁）。

(26) マシュハドの宗教学院の歴史は、Pasandīde, Maḥmūd, *Ḥowze-ye ʻelmīye-ye Khorāsān : jeld-e avval - Madāres-e ʻelmīye-ye Mashhad*, Mashhad : Bonyād-e pazhūheshhā-ye eslāmī, 1385kh. に詳しい。

(27) 拙稿「サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザー廟のワクフ」一一六頁。

(28) Burton, A., *The Bukharans : A Dynastic, Diplomatic and Commercial History 1550–1702*, Richmond : Curzon Press, 1997, pp. 399–402. 但し、同書によれば、中央アジアからの商人は、マシュハドでのシーア派の参詣客を嫌い、同地を経由せずにイラン方面に向かうルートも利用していたとのことである。

(29) マクチェスニー氏は、一七世紀に中央アジアからサファヴィー朝のエスファハーンに遣使として向かったモハンマド・バディ Moḥammad Badī' の旅行記 "*Muzakkir al-aṣḥab*"（一六八八―八九年（一一〇〇 A.H.年）頃完成。写本はタジキスタン、ウズベキスタンに計二点存在）を利用し、この時代におけるマーワラーアンナフルとイラン地域の文化的な差異に関する論考を執筆している。同論考では、この史料の著者がマシュハド滞在時に、当時のホラーサーンのヴァズィールであったミールザー・サアドアッディーン Mīrzā Sa'd al-Dīn がチャハール・バーグを永遠の天国のような青々とした庭園に作り上げた、と記していることが引用されている（McCheney, R. D., "'Barrier of Heterodoxy'?: Rethinking the Ties between Iran and Central Asia in the Seventeenth Century", in Charles Melville (ed.), *Safavid Persia : The History and Politics of an Iranian Society*, London and New York: I. B. Tauris, 1996, p. 243）。

(30) サファヴィー朝の同バーグにおける王族の滞在や地方知事の宿営地化については、Ḥoseynī, "Chahār bāgh-e Mashhad-e Tīmūrī dar āyīne-ye tārīkh", pp. 77–79 に言及がある。但し、後代の史料を典拠にしている箇所もあるため、注意が必要である。

(31) マシュハドは一七二三年にスィースターン方面から進出したマレク・マフムード Malek Maḥmūd Sīstānī（一七二六年没）の手に落ちる。ナーデルは一時期彼に帯同するも、のちに袂を分かち、タフマースプ二世と行動を共にして一七二六年にマシュハドを制圧し台頭していく。

(32) *ʻĀlam-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 202.

(33) *ʻĀlam-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, pp. 202–3.

(34) *Zabūr-e Āl-e Dāvud*, p. 98., *Mojmal al-tawārīkh*, p. 45., *Majma' al-tawārīkh*, p. 106., *ʻĀlām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 203. なお、このバーグには「王権の本拠」、「王権の館」なる形容を付されているが、こうした語は必ずしも同時代の首都に付された語句ではないことから、マシュハドにおける王族の滞在地という程度の意味を表すと考えられる。こうした「首都」を表す表現の問題については、平野豊「ガズヴィーン遷都の年代比定―一六世紀サファヴィー朝文化史再編の視点から」『イスラム世界』四八号、一九九七年、四二頁を参照のこと。

(35) Jāmī, Maḥmūd Ḥoseynī, *Tārīkh-e Aḥmadshāhī*, Gholāmḥoseyn Zargarīnezhād (ed.), Tehrān : Entesharāt-e Dāneshgāh-e Tehrān, 1384kh., p. 145.

(36) *Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, pp. 202–03, vol. 2, pp. 771–72. なお、同史料の該当箇所で「宮」と訳出した語は複数形（'emārāt）で書かれているが、仮にハシュト・ベヘシュトが複数の建物で構成されているとしても、その個々の建物に関する記述が皆無であるため、ここでは単一の建物であると解釈した。

(37) タブリーズでは白羊朝のウズン・ハサンが同名の建物を建設している。ヘラートでも名称は不明なるも、バーグに同様の構造を持った建物が建設されたことが指摘されている。なお、ムガル朝においても、バーグの中の廟建築として同名かつ同様の構成を持つ建物が多く見られる。代表例にはデリーのフマユーン廟がある（Golombek, L., "From Tamerlane to the Taj Mahal", in Abbas Daneshvari (ed.), *Essays in Islamic Art and Architecture*, Malibu, Calif. : Undena Publications, 1981, pp. 43–50）。

(38) サファヴィー朝期エスファハーンのハシュト・ベヘシュト宮について、シャルダンは謁見の間として用いられていたことを記している（羽田正編著『シャルダン『イスファハーン誌』研究―一七世紀イスラム圏都市の肖像』東京大学東洋文化研究所第一七輯、一九九六年、一三三―一三六頁）。ウズン・ハサンが建設したハシュト・ベヘシュト宮について羽田氏は謁見の間としての利用を指摘している（羽田正「牧地都市と墓廟都市―東方イスラーム世界における遊牧政権と都市建設―」二〇頁）。

(39) サファヴィー朝期の事例では、ドゥラト・ハーネは首都のみならず地方にも建設され、首都のものは君主の居住施設兼政府高官の詰所、地方では行宮や冬営時の滞在時の「地方離宮」として利用された（平野豊「シャー・タフマースプ一世治下の宮廷とゴム、エスファハーンの戦時協力関係―ハーネ・クーチの都市移送に関する事例研究（一）」『駿台史学』一〇九号、二〇〇〇年、一〇―一二頁）。同王朝期のマシュハドのドゥラト・ハーネは、この地が首都ではなかったことから、平野氏の言う「地方離宮」的なものであったと考えられよう。なお、同王朝期のマシュハドのドゥラト・ハーネにおける君主の滞在については、*Tārīkh-e 'Ālam-ārā-ye 'Abbāsī*, vol. 2, p. 611 等に事例が見られる。

(40) その事例は、Mostowfī, Moḥammad Moḥsen, *Zobdat al-tavārīkh*, Behrūz Gūdarzī (ed.), Tehrān : Bonyād-e mowqūfāt-e doktur-e Maḥmūd Afshār, 1375kh., p. 148, *Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 103 に記述がある。後者ではナーデルがこのバーグに入った際、ここで息子たちとの面会等を行い、その翌日に別な箇所に向かったと述べられており、この建物に滞在していたと考えるのが妥当であろう。*Aḥmadshāhī*, p. 144, 153 等にはバーグの中にあった darkhāne-ye shāhī/darkhāne-ye pādshāh（君主の館）なる建物の記述があるが、このドゥラト・ハーネを指していると考えられる。また、オターレディー氏もガージャール朝以前のチャハール・バーグ一帯は王朝の貴

顕や役人たちの住む区画であったと述べる（'Oṭāredī, *Farhang-e Khorāsān*, vol. 1, p. 204.）。

(41) *Zobdat al-tavārīkh*, p. 148. また、*'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 206 にあるチャハール・バーグの建物、ハシュト・ベヘシュト宮への絨毯の用意に関する記述は、日付の記載がないがこの際の出来事を指すと考えられる。

(42) *Aḥmadshāhī*, p. 144.

(43) サファヴィー朝末期一六九三―九八年（一一〇五―一〇A.H.年）の年代記 *Dastūr-e shahriyārān* の一六九四―九五年（一一〇六A.H.年）の箇所に当該の記事がある（Naṣīrī, Moḥammad Ebrāhīm, *Dastūr-e shahriyārān*, Moḥammad Nāder Naṣīrī Moqaddam (ed.), Tehrān : Bonyād-e mowqūfāt-e doktor Maḥmūd Afshār, 1373kh., p. 80）。註(29)で示したように、サファヴィー朝後期になってマシュハドのバーグの開発が進められていることから、本文中の宮殿にその名が冠されている人物はこのエリヤース・ハーンである可能性もあろう。

(44) *'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, pp. 163–5, *Zabūr-e Āl-e Dāvud*, p. 113, *Majma' al-tavārīkh*, p. 116.

(45) *Zabūr-e Āl-e Dāvud*, p. 113, *Majma' al-tavārīkh*, p. 116.

(46) なお、エスファハーンのハシュト・ベヘシュト宮に噴泉が据え付けられていた（羽田正編著『シャルダン『イスファハーン誌』研究』一三三―三四頁）。

(47) *'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 203.

(48) *'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 165.

(49) 'Oṭāredī, *Farhang-e Khorāsān*, vol. 1, p. 211. なお、旧メイダーンという地名の記述は、Anzābīnezhād, et al. (eds.), *Bist vaqfhāme az Khorāsān*, p. 220 に見える。

(50) サファヴィー朝後期のサフィー・ゴリー・ベグ Ṣafī Qolī Beyg の一六六五年（一〇七六A.H.年）のワクフ文書において、本文中で言及した同バーグの前庭の存在が示されている。このワクフについては文書の要約が *Āṣār al-Razavīye*, pp. 169–170 に掲載されており、拙稿「サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザー廟のワクフ」一二一―一二二頁でも言及している。

(51) *Aḥmadshāhī*, p. 153.

(52) この前庭という説明書きは *Mojmal al-tavārīkh*, p. 53, *Majma' al-tavārīkh*, p. 132 に見える。*Zabūr-e Āl-e Dāvud*, p. 122 では、「吉兆なるドウラト・ハーネの前庭であるメイダーン」と説明されている。この前庭 jelowkhān/jelowkhāne とはインドの庭園・宮廷建築に良くみられるものである。具体例を一つ示せば、一八世紀北インドのアワドの政権下の宮廷の建築複合体の中にも存在し、本文中で後述するイラン地域のメイダーンと同様の役割を果たしていたことが窺える（Keshani, Hussein, "Theatres of power and piety : Architecture and court culture in Awadh, India", in Albrecht Fuess and Jan-Peter Hartung (eds.), *Court cultures in Muslim world : Seventh to nineteenth centuries*, London and New York : Routledge, 2011, pp. 445–471）。

(53) 新メイダーンという名称は Anzābīnezhād, et al. (eds.), *Bist vaqfhāme az Khorāsān*, p. 219 に見える。

(54)　インド遠征で勝利した一七三九年（一一五一 A.H. 年）に、マシュハドでは市内を装飾し、演奏や歌唱、踊りでその戦勝を祝うが、その際にブハラからやってきたハッジ・エブラーヒーム Ḥājj Ebrāhīm なる綱渡り芸人 rīshmān-bāz がアーリー・ガープーの上とナグシェ・ジャハーンのメイダーンの旗頭 qapāk の下、楽隊演奏所の上に綱を張って、その綱の上を渡ってみせたという記述がある（*'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 2, pp. 771–772）。よって、この記述中に現れる建物はメイダーンに面した形で存在したと考えられる。なお、サファヴィー朝期のエスファハーンでは、メイダーンの北側にあったバーザールの入口のところに楽隊が演奏を行う場所があったという（Lambton, A. K. S., "Nakkara-khana", in P. Bearman et al. (eds.), *Encyclopaedia of Islam*, second edition, vol. 7, 1993, pp. 927–930）。

(55)　Babaie, Susan, *Isfahan and its palaces : Statecraft, shi'ism and the architecture of conviviality in early modern Iran*, Edinburgh : Edinburgh university press, 2009, pp. 35–40, 47–55. 羽田正「メイダーンとバーグーシャー・アッバースの都市計画再考一」『橘女子大学研究紀要』一四号、一九八七年、一八八—九四頁。

(56)　*Zabūr-e Āl-e Dāvud*, p. 122, *Majma' al-tavārīkh*, p. 132.

(57)　*Aḥmadshāhī*, p. 153 にメイダーンに置かれていたと思しき大砲 tūp を外部へ引き出す旨の記述がある。

(58)　*Zabūr-e Āl-e Dāvud*, p. 132., *Majma' al-tavārīkh*, p. 142. ユーソフ・アリー・ハーン Yūsof 'Alī Khān をはじめとしたジャラーエル部族の領袖らがこのメイダーン meydān-e shāhī で殺害される。但し、*Aḥmadshāhī*, p. 266 では、この人物らの最後は盲刑に処された上でトルシーズ Torshīz 方面に送られたと記されている。なお、この事件は *Aḥmadshāhī*, p. 266 の記述に従えば一七五二—五三年（一一六六 A.H. 年）のことと考えられる。

(59)　ナーデル期の戦勝記念のためのこのメイダーンでの曲芸披露の例については、本稿註(54)を参照のこと。

(60)　メイダーンについては、その周囲が店舗で埋め尽くされるケースが見られ、ガージャール朝期エスファハーンの旧メイダーン（坂本勉「一九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン（Ⅲ）」『史学』五一巻三号、一九八一年、六四—六五頁）、さらにはテヘランのバーザールのメイダーン（近藤信彰「一九世紀テヘランの大バーザール：発展、構成、所有関係」『上智アジア学』二五号、二〇〇七年、一六六頁）の事例の指摘がある。このメイダーンも周囲が店舗で埋め尽くされていた可能性もあろう。

(61)　メイダーンの機能については、坂本勉「一九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン（Ⅲ）」六〇—六七、七三—七四頁を参考にした。

(62)　サファヴィー朝後期エスファハーンの王宮地区にも、「厨房門」が存在し、その一帯には厨房や食料の貯蔵庫があったとされる（Blake, S. P., *Half the world : The social architecture of Safavid Isfahan, 1590–1722*, Costa Mesa : Mazda Publishers, 1999, p. 73）。

(63)　*Aḥmadshāhī*, p. 151.

(64) *'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 3, p. 982. ロッカート氏はこの政策を先行するサファヴィー朝の宗教政策への否定であると評する（Lockhart, *Nadir Shah ; A Critical Study Based Mainly upon Contemporary Sources*, pp. 278–279）。

(65) Tucker, *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, p. 71.

(66) Astarābādī, Mīrzā Mehdī Khān, *Jahāngoshā-ye Nāderī*, Seyyed 'Abd Allāh Anvār (ed.), Tehrān : Anjoman-e āṣār va mofākher-e farhangī, 1377 kh., p. 62, *'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 203.

(67) *'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 169.

(68) クラートの城塞の建設自体はクルト（カルト）朝期のことと言われる（O'Kane, Bernard, *Timurid Architecture in Khurasan*, Costa Mesa, Calif. : Mazda Publishers, 1987, pp. 115–118）。

(69) *'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 200. なお、ワクフ文書によると、八角形型の大理石であったとのことである（Anzābīnezhād, et al. (eds.), *Bīst vaqfnāme az Khorāsān*, p. 222）。

(70) 同廟の水場への水供給に関しては、ワクフ文書ではトログ（村）の水āb-e Ṭoroq を用いるようにとの記載がある。本文中で先に触れた *'Ālām-ārā-ye Nāderī* にあるゴレスタターン村からの水は廟の溜池に流されたとあるので、水場用の水利設備は別途整備されたと推測される（Anzābīnezhād, et al. (eds.), *Bīst vaqfnāme az Khorāsān*, p. 223）。

(71) *'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 2, p. 826.

(72) Anzbānezhīd, et al. (eds.), *Bīst vaqfnāme az Khorāsān*, pp. 224–225, 227. ワクフ文書にその名が見える埋葬者の筆頭に挙げられているバーバー・アリー・ベグは、ナーデルの活動開始期にアビーヴァルド Abīvard の支配者であった人物で、ナーデルは彼の下で砲兵長 tofangchī-āqāsī に任じられて以降、軍事的な名声を高めていくことになる。彼は一七二三年（一一二九A.H.年）のアフガン軍との戦闘で亡くなるが、その遺体はレザー廟に運ばれた。また、彼の娘二名がナーデルに嫁いでいる（*'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 12, 14, *Jahāngoshā-ye Nāderī*, p. 28）。この人物の他に埋葬されていた五名（タアーン・ハーノム Ṭa'ān Khānom、サフィー・ゴリー・ベグ Ṣafī Qolī Beyg、モルタザー・ゴリー・ベグ Mortaẓā Qolī Beyg、ハディージェ・ハーノム Khadīje Khānom、シャームルー・ハーノム Shāmlū Khānom）の経歴等については管見の限り不明である。なお、廟の建材については、*'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 204 に記述がある。

(73) *'Ālām-ārā-ye Nāderī*, vol. 1, p. 202.

(74) ナーデルはティムールを模倣した多くの活動を展開することでも自身の支配の正統性の確保に努めたと言われる。その具体例として、オスマン朝、ムガル朝、中央アジアとの外交とこれらの諸勢力に対する遠征活動の模倣、孫へのシャー・ロフなる名の命名などが指摘されている（Tucker, *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, pp. 72–74）。

(75) 完成した年については、*'Ālām-ārā-ye Nāderi*, p. 204 に記載がある。

(76) 同廟の被葬者や天蓋の数については、ガージャール朝期の史料 Nūrī, Moḥammad Taqī, *Ashraf al-tavārīkh*, vol. 1, Sūsan Aṣīlī (ed.), Tehrān : Mīrāṣ-e maktūb, p. 296 に同廟が破壊された際の記述があるが、その中に見える。

(77) 建物の構成や敷地内の水場の存在、庭師への給金の支払いについてはワクフ文書に記述がある（Anzābīnezhād, et al.（eds.）, *Bist vaqfnāme az Khorāsān*, pp. 224–225, 227）。

(78) *'Ālām-ārā-ye Nāderi*, vol. 2, p. 799, 827.

(79) *Zabūr-e Āl-e Dāvud*, p. 114., *Mojmal al-tavārīkh*, p. 47., *Majma' al-tavārīkh*, p. 119.

(80) マラーゲ産の大理石製の門の設置については、廟の破壊後にマシュハドを訪れたフレイザー Fraser による廟の外観を回想した記述に見える（Fraser, J., *Narrative of a Journey into Khorasan in the years 1821 and 1822.*, London : Longman, Hurst, Reesm Orme, Brown, and Green, 1825, repr. Delhi, New York : Oxford University Press, 1984, p. 462）。

(81) なお、同ワクフのうち、ナーデル廟を受益対象とした箇所については、Mokhlesi, "Mashhad-e pāytakht-e Afshāriyān", p. 629 にも言及があり、同文書に基づく建物の構造の推定も試みているが、墓廟建築の特徴や建設の意図にまで踏み込んだ考察を行っていない。

(82) 前近代におけるスンナ派、シーア派王朝君主の埋葬・墓廟の違いについては、羽田正「スルタン・スレイマーンとシャー・アッバース―ムスリム君主の墓廟観―」『歴史と地理　世界史の研究』一四七号、一九九一年、一―一二頁を参照のこと。

(83) ここで言及したサファヴィー朝期を除くセルジューク朝以降のイラン地域とインドの廟の特徴については、ラッグルズ、フェアチャイルド『図説　イスラーム庭園』桝屋友子（監修）、木村高子（訳）、原書房、二〇一二年、一二七―一三六頁を参考にした。

(84) タブリーズに建設されたガザン・ハン廟を含む宗教慈善複合体はガザニーヤと呼ばれ、マドラサ、天文台、浴場、病院等がワクフにより運営され、慈善面での一〇〇名の孤児へのコーラン教育や困窮者への衣服、靴の支給、朝晩の貧者、住民への食事の配布が定められていたという。また、スルターニイェに建設されたオルジェイト廟にも同様の慈善施設が建設されている（羽田正「牧地都市と墓廟都市」三―一八頁）。

(85) Tucker, *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, p. 76.

(86) 同王朝期におけるワクフによる商業インフラの整備に関しては、本文中に既出のサフィー・ゴリー・ベグ、アッバース・ゴリー・ハーンが多数の店舗等をワクフ財として設定していたことが確認できる（拙稿「サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザー廟のワクフ」一二一―二三頁）。

(87) ワクフ財、ワクフ管財人職の継承法に関しては、

Anzābīnezhād, et al.（eds.）, *Bīst vaqfnāme az Khorāsān*, pp. 218–222, 225–226 に記載がある。

(88) 翻刻では SRĀḤY と表記され、校訂者は判読不明としている。*Āṣār al-Razavīye*, p. 160 では冒頭の文字が *se* に見えるため、その後の文字 Ḥ を jim の点が落ちたものと解し、鞍製造業 sarrāji と仮に解釈した。

(89) 羽田正「メイダーンとバーグ」一九〇頁。Blake, *Half the world : The social architecture of Safavid Isfahan, 1590–1722*, p. 114.

(90) サファヴィー朝期におけるコーヒーハウスの役割に関しては、Mathee, Rudi, "Coffee in Safavid Iran : commerce and consumption", in *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 37–1, 1994, pp. 20–27を参考にした。なお、マテー氏によれば、コーヒーハウスにおける男娼の存在といった風紀の乱れは、アッバース二世期の宰相ハリーフェ・スルターン Khalīfe Solṭān 期における政策の転換により一掃されたと言う。この点に関してはシャルダンの記述も参考になろう（シャルダン、J.、『ペルシア見聞記』岡田直次訳注、平凡社東洋文庫、一九九七年、二三二頁）。

(91) シャー・アッバースはコーヒーハウスによく通っており、一六一九年（一〇二九 A.H.年）にトルコ、インド、ロシア等の使節をコーヒーハウスに呼び出し、宴席を設けたこともあったという（Mathee, "Coffee in Safavid Iran : commerce and consumption", p. 17., Āle Dawūd, 'Alī, "COFFEEHOUSE" in Ehsan Yarshater.（ed.）, *Encyclopedia Iranica*, vol. 4, 2000, pp. 1–4）。

(92) Mathee, "Coffee in Safavid Iran : commerce and consumption", p. 9.

(93) マクチェスニー氏は先述の"*Muzakkir al-aṣḥab*"の記述を元に、当時マシュハドに二軒のコーヒーハウスが存在したことを指摘する（McCheney, R. D., "'Barrier of Heterodoxy"? : Rethinking the Ties between Iran and Central Asia in the Seventeenth Century", pp. 243–244.）。また、ワクフ財としてのコーヒーハウスについては、註(50)で言及したサフィー・ゴリー・ベグのワクフ文書にて、チャハール・バーグの前庭のコーヒーハウスがワクフ財として設定されている（拙稿「サファヴィー朝後期におけるイマーム・レザー廟のワクフ」一二一―一二二頁）。

(94) 文書中では、「コーヒーハウスと店舗群 qahvekhāne va dakākīn」という形で記載されている（Anzābīnezhād, et al.（eds.）, *Bīst vaqfnāme az Khorāsān*, p. 222）。なお、シャルダンは前王朝のコーヒーハウスの内部空間につき、広々とつくられた大サロンとなっており、泉水が置かれてその周りに石か木の壇での廊下のようなものをめぐらせていて、そこに人が座れるようになっていた、と伝える（シャルダン、J.、『ペルシア見聞記』岡田直次訳注、二二一頁）。このように、コーヒーハウスはその店構えも独特な様相を持っていた。

(95) なお、翻刻では旧メイダーンの店舗数の合計が二九軒となっているが、実際に記載されている店舗数を数えると二八軒にしかならない（Anzābīnezhād, et al.（eds.）, *Bīst*

本勉「一九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン（Ⅲ）」六二―七二頁。

(99) ジョージ・トンプソンGeorge Thompsonなる商人が一七四一年にマシュハドを訪れており、その際の記録をハンウェイが自身の著書に載せている（Hanway, Jonas, *An Historical Account of the British Trade over the Caspian Sea*, vol. 1. London : Sold by Mr. Dodsley, 1753, p. 356）。

(100) Perry, John R., "Forced Migration in Iran during the Seventeenth and Eighteenth Centuries", in *Iranian Studies*, 8–4, 1975, pp. 208–209.

(101) マシュハドのユダヤ教徒については、ナーデルがガズヴィーンから四〇もの名家を移住させたと指摘されるが、口承伝承を典拠としており（Sabim, Haideh, "Two wars, two cities and two religions : The Jews of Mashhad and Herat wars", in Houman M. Sarshar (ed.), *The Jews of Iran : The History, Religion and Culture of a Community in the Islamic World*, London and New York : I. B. Tauris, 2014, p. 76）、管見の限りペルシア語等の同時代史料には当時の彼らについての言及が確認できないため、本稿では考察の対象から外した。なお、マシュハドのユダヤ教徒共同体は後のガージャール朝期一八三九年三月二五日（二二五五年一月一〇日A.H.（アーシューラー））にユダヤ教徒の子供が起こしたムスリムへの冒涜行為によって殺害と略奪の対象となり、生き残った人々は強制改宗の憂き目にあうという事件が起きる（Hedāyat, Reẓa Qolī Khān, *Tārīkh-e rowẓat al-ṣafā-ye Nāṣerī*, Jamshīd Kiyānfar

vaqfnāme az Khorāsān, pp. 220–221）。*Ketābche-ye Mouqūfāt-e Āstān -e Qods-e Raẓavī*, Ketābkhāne-ye Āstān-e Qods-e Raẓavī, MS. No. 8557, fol. 45–54. では、翻刻では一軒となっている搾油業が二軒do bābと記載されているため、そちらに従った。

(96) このバーザールとチャハール・スーグは現存せず、正確な場所は不明である（'Oṭāredī, *Farhang-e Khorāsān*, vol. 1, p. 211.）。レザー裔サイイドに関する文書の写しを多数収録する史料*Shajare-ye ṭayyebe*のうち、一七一七年（一一二九A.H.年）の賃貸文書の中に「チャハール・スーグに近接するメイダーンのバーザール」という表現が見える（Raẓavī, Mīrzā Moḥammad Bāqer, *Shajare-ye ṭayyebe ; dar ansāb-e selsele-ye sādāt-e 'alavīye-ye Raẓavīye*, Moḥammad Taqī Modarres Raẓavī and Mehdī Seyyedī (eds.), Mashhad : Āhang-e qalam, 1384kh., p. 275）ため、前王朝末期におけるこのバーザールの存在は確認できる。

(97) こうした特定の業種の名称を冠したバーザールでは、確かにその業種の店舗の集中が見られたが、その業種の店舗が必ずしも全体の過半数を占めていたわけではない場合があることにも留意する必要がある（近藤信彰「テヘランの大バーザール：発展、構成、所有関係」一七四頁）。ここでのバーザールの店舗の詳細までは確認できないが、恐らくはその名がついている業種の店舗が多数存在していたと考えられる。

(98) ガージャール朝期のエスファハーンにおいて旧メイダーンが商業面での重要性を担っていた点については、坂

(ed.), Tehrān : Asāṭīr, vol. 14, pp. 8262–63)。

(102) 同王朝期のイラン地域各地におけるアルメニア人共同体の状況については、Ghougassian, Vazhen S., *The Emergence of the Armenian Diocese of New Julfa in the Seventeenth Century*, Atlanta : Scholars Press, 1998, pp. 33–47 を参照した。

(103) *'Ālām-ārā-ye Nādirī*, vol. 3, p. 1076., *Zobdat al-tavārīkh*, p. 165, Artin Efendi, Tanburi, *Tahmas Kulu Han'in Tevarihi*, Esat Uras (ed.), Ankara : Turk Tarih kurumu basımevi, 1942, p. 36. なお、エスファハーンを手本にしたことに関して記述する *Zobdat al-tavārīkh* の校訂の該当箇所は「be vaz'-e khołafā'-e Eṣfahān」となっているが、khołafā' は Jołfā の誤りと思われるため、訂正した上で解釈した。

(104) タッカー氏もこのアルメニア人の移住につき、エスファハーンの新ジョルファーにおける居住区形成との類似性を指摘している（Tucker, *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*, p. 68）。但し、筆者はこの移住政策について、ここではバーグの件等も含め、ナーデルがエスファハーンを範とした形でのマシュハド全体の整備を進める際の都市計画のひとつに位置づけている。

(105) *'Ālām-ārā-ye Nādirī*, vol. 3, pp. 1076–77.

(106) なお、ガージャール朝期のレザー廟ワクフ管財人ミールザー・ファズロッラー Mīrzā Faẕlollāh（在職一八五四—五六年）の時代に、マシュハドの隊商宿にいるいかがわしい女性、浴場にいる髭のない少年の追放令が出されている。この命令は、この頃にも盛んに行われていたであろう売春を排除し、都市の綱紀を正すために発布されたものと思われる（Bastānī, Nowrūz 'Alī, *Ferdous al-tavārīkh*, Tehrān : Ketābkhāne, mūze va markaz-e asnād-e majles-e showrā-ye eslāmī, 1390kh., p. 60）。

(107) ザリーフ移設については、*Zabūr-e Āl-e Dāvud*, p. 114., *Mojmal al-tavārīkh*, p. 47., *Majma' al-tavārīkh*, p. 119 を参照のこと。ザリーフの価値は後者の当該部分に記述がある。なお、ナーデル没後の混乱については、小牧昌平「一八世紀中期のホラーサーン—ドゥッラーニー朝とナーデル・シャー没後のアフシャール朝—」『東洋史研究』五六巻二号、一九九七年、三六六—九〇頁に詳しい。

(108) アリー・シャーは後に破壊された自身の廟を受益対象としたワクフを行っており、一七四八年（一一六一 A.H. 年）のワクフ文書がホラーサーンのワクフ慈善庁に保管されている。このワクフについては Seyyedī, *Sīmā-ye tārīkhī-farhangī-ye shahr-e Mashhad*, pp. 63, 125–126 を参照のこと。

(109) ナーデル廟の破壊については、先述の通り *Ashraf al-tavārīkh*, vol. 1, p. 296 に記事がある。なお、同廟の破壊はカーゾン卿の著書の記述に基づきアーガー・モハンマド・ハーン期の出来事であると言われるが、*Ashraf al-tavārīkh* の校訂者であるスーサン・アスィーリー氏は本史料のこの部分の記述の方がより正確であると脚注で述べている（*Ashraf al-tavārīkh*, pp. 496–97）。

(110) ホセイニー氏によれば、バーグ一帯の荒廃後に同名の

街区（maḥalle-ye Chahār bāgh）が置かれるも、その名もマシュハドの区画整理で後に使われなくなり、現在ではバーグがあった場所にある通りの名前として僅かに痕跡を残すのみである（Ḥoseynī, “Chahār bāgh-e Mashhad-e Tīmūrī dar āyīne-ye tārīkh”, p. 84）。